

エコロジー理論から見る日本伝統的食文化「うなぎ」 —3・11の啓発による自然との調和を目指して—

曾秋桂/ Tseng, Chiu-Kuei

淡江大學日本語文學系教授

Department of Japanese, Tamkang University

【摘要】

本論文首先回顧每逢7月土用之日，日本人習慣吃的鰻魚在日本文獻上的記載與確定在日本飲食上不動之地位的過程。繼之；從日本人常使用的諺語、以鰻魚為主題描繪的小說、電影的各角度，多方面探討鰻魚的多元化面相，藉以摸索出日本人今後如何從自然生態來思考如何與即將瀕臨絕跡的鰻魚相處之道。

【關鍵詞】

鰻魚、生態批評、歷史、社會文化、環境問題

【Abstract】

The gastronomic culture which will eat an eel on the doyo-no-ushino-hi in July is fixed to Japan for many years every year. However, a fish catch of an eel decreases and the news of being specified as endangered species is also flowing in recent years. This report would like to think towards aiming at harmony with nature by ecology theory in such international conditions. First, an eel looks back upon the history fixed to Japanese society from ancient times to the present age. The ecriture of the "eel" of Japanese social-culture is solved from history and a sociocultural aspect. Simultaneously, a possibility of changing Japanese traditional gastronomic culture is explored from a relation with an environmental problem. I would like to do this research the trial which searches for the possibility that the relation between nature and a human being renewals, from the field of Japanese traditional gastronomic culture and eco-criticism.

【Keywords】

eel, eco-criticism, history, social-culture, environmental problem

1.はじめに

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分に日本が未曾有の「三位一体の受難」¹(地震・津波・原発事故)に見舞われた事件は、「東日本大震災」(2011.3.11、通称 3・11)と呼ばれている。3 周年を過ぎた今日も、爆発した福島原子力発電所から飛散、流出している放射性物質に汚染された土地や水の処理や地域社会への対策に苦慮している日本政府は、被害収拾のメドを立てておらず、事態は深刻になる一方である。天災が直接の引き金だったとは言え、現在の人間の科学技術では対応し切れない厳しい環境問題に直面すると、ドイツの社会学者、ウルリッヒ・ベックが主張した「リスク社会」の言葉が改めて思い出される。ウルリッヒ・ベックが 1986 年に出版し、欧米でベストセラーとなった『危険社会』²では、現代社会を「リスク社会」と呼んで、産業社会が新たな時代の「第二の近代」に入り、いまだかつて見られない「新しいリスク」を抱えるようになったと指摘している。日本の 3・11 大震災で大変な惨禍をもたらしている福島原発爆発事故も、原子力発電は人間社会が生み出した現代文明の産物であるにも関わらず、一度コントロールを失うと、まったく制御不能となった各種放射性物質や放射線被曝などは、まさにベックが言った「新しいリスク」そのものである。こういった「新しいリスク」は、ポスト 3・11 の現在さらに明確な形として、日本を含むグローバル社会の全人類に生存の危機として迫ってくる。

実は、こうした放射性物質がもたらす脅威に対して、人類社会が直面したのは、1945 年のアメリカ軍による 2 回の原爆投下以降始まった米ソ冷戦時代の核兵器開発競争からであり、1950 年代にはアメリカでは核戦争がもっとも現実的な戦争の危険性を帯びていた。同時に、核開発は多くの核実験を伴い、環境汚染やそれに伴う人体被害も、1950 年代から 1960 年代は非常に広範囲に渡

¹マニュエル・ヤン(2012.2)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての 3・11』河出書房新社 P93 では、「3・11 における三位一体の受難(地震/津波/原発事故)は死の覚悟をわたしたちに植え付けた」とある。

²ウルリッヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(1998)『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局、台湾では、Ulrich Beck 著・汪浩訳(2004)『風險社會—通往另一個現代的路上』巨流圖書公司、国立編訳館の責任のもと出されている。

る環境問題であった³。現在、日本やアメリカの映画の代表的な怪獣キャラクターである「ゴジラ」は、こうした1950年代の核実験の放射性物質が深海に眠っていた恐龍を変異させて生まれたという設定で登場したキャラクターであり、まさにこの時代の放射性物質の脅威を体現する存在であった⁴。1970年代以後、核軍縮が進んだことで核戦争と核兵器の脅威は潜在化し、逆に平和利用の形態として日常生活に入り込んできた原子力発電所が顕在的脅威になって、1980年代のチェルノブイリ、そして2011年の3・11で大規模な放射性物質による地球環境汚染が現実化したのである。「リスク社会」とは、日常化した科学技術の脅威に直面している社会の現実を指摘したものであり、こうした脅威は様々な環境問題の別の表現とも言える。

3・11が人類に警告している上述の危機と同じように、長年、日本の社会と文化に深く根付いてきたウナギのことも、環境問題として真剣に考えなければならない時代がやってきた。いかなる時代でも生態・環境は、今までの人類の歴史の中で人間が生活の便利を図り、文明を建設し続けたために、常に破壊されてきたが、如何なる生物も生命活動を営んでいくために、否応なしにその生態・環境と関わらなくてはならないという現実是不変である。文明がどんなに発達しても、生物である以上、人間も又同じ制約を受けることになる。環境の悪化には、自然要因と人的要因があるが、過去の歴史は極度の環境悪化が文明を衰退させることを教えている⁵。

2013年3月に開かれたワシントン条約締約国会議では、ニホンウナギが規制対象とされることが見送られたが、2014年6月12日にウナギが絶滅危惧種リストに指定されることがあると発表されたことにより、日本のウナギ業界だけではなく、日本国民にも少なからぬ打撃を与えたという。絶滅危惧種へリストされるとしたら、台湾などの外国から日本への輸入が法的に禁止されることとなり、普段の食生活でも土用の丑の日にウナギを食べる習慣なども、日本文化から姿を消してしまうことになるに違いない。こうした深刻な時期に、日本

³Wikipedia「核兵器の歴史」は詳細な文献を引用して20世紀の核兵器開発の経過と影響を論じている。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%B8%E5%85%B5%E5%99%A8%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2> (2014年12月15日閲覧)

⁴Wikipedia「ゴジラ」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B4%E3%82%B8%E3%83%A9>参照。(2014年12月15日閲覧)

⁵石弘之、安田喜憲、湯浅赳男(2008)『環境と文明の世界史』洋泉社

の国民もそうであるが、グローバル社会の一員である地球村の我々が日本の食文化に根ざしたウナギが消滅しかけていることを警鐘的事例と捉え、エコロジー理論により自然との調和を目指す方向で現在の経済活動を再考すべきだと思い、このテーマにしたのである。

一国の生活文化は、歳月を経て積み重なられた重要な人類の知恵だと認識される。本論文は、現在、絶滅危惧種に指定されたウナギが辿ってきた人類との関係の歴史を振り返って見ることによって、ウナギと同じ地球上の生物である人間の我々が今後取るべき方向を提示することを目的とする。

2. エコロジー理論の詳細

エコロジー・生態学(ecology)の概念に由来するエコクリティシズム・環境批評(ecocriticism・environmental criticism)は、批評理論・方法論として成立した。

2.1 エコクリティシズムの定義

巴山岳人の論説⁶では、「エコクリティシズム (ecocriticism)」とは、20 世紀後半における地球環境の破壊に対する危機意識を背景に形成され、生態学における諸概念や哲学などに見られるエコロジカルな思想を取り入れた文学批評のジャンルである。環境破壊の拡大に対し、文学の分野から積極的に関わっていくという姿勢、そして文学作品やその研究が環境問題の考察に非常に貢献するという意識がその特徴として挙げられる。「環境批評 (environmental criticism)」とは、2005 年に L・ビュエル (Lawrence Buell) がエコクリティシズムに代わる名称として提唱したもので、従来の「(原生) 自然」に重きを置いた研究の範囲を拡大し、社会における種々のイデオロギーや制度とも交錯するハイブリッドな領域としての「環境」を射程に入れることを意図とされている。しかしながら、現在でも「エコクリティシズム」がこの批評ジャンルを示す名称として一般的に使用されているという。

2.2 エコクリティシズムの援用

エコクリティシズム・環境批評(Ecocriticism)は、松岡幸司の説⁷では、文学

⁶ 巴山岳人の論説は、<http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism/>による。(2014年3月30日閲覧)

⁷ 松岡幸司 (2011) 「『1842年7月8日日蝕』：翻訳と解説—ネイチャーライティングとしてのシェティフター」『信州大学人文社会科学研究』4号P143

作品を生態学的スタンスで捉える研究手法として、1980年代からアメリカを中心に発展してきた、「自然」や「環境」を中心に据えた文学研究であるが、実際には文学作品全般の環境意識や自然の位相のみならず、エコロジー(思想)の立場から文化全域に及ぶ新しいパラダイムを提示する文化批評ということができる。山里勝己は、視点を「ネイチャーライティング」と「エコクリティシズム」との発展に据え、「「ネイチャーライティング」が80年代にすでに市民権を獲得していたとしても、「エコクリティシズム」という、いまやあたりまえのように使われる批評用語が抵抗なく受け入れられるようになったのは、アメリカ文学・環境学会の初代会長をつとめたスコット・スロヴィックに言わせれば、1990年代半ば頃のことであった」⁸とした上で、その相違を「急速に拡大しつつあるジャンルを、われわれはいまネイチャーライティング(あるいは環境文学)と呼び、そのような文学を扱う方法をエコクリティシズムと呼ぶようになってきているのである」⁹とした。さらに、エコクリティシズムの文学・文化の批評へ応用を、「テキストを緻密に読み解くことで斬新な結論に至り、さらには文学史的な洞察にまで深まるこのような手法はきわめて刺激的である。ここには詳細でたしかな分析から滲み出る知的な興奮が感じられる」¹⁰と高く評価した。それに先立って、野田研一は、エコクリティシズムの根幹については、「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移で、エコクリティシズムの領域とは、文学における人間中心批判の遂行、およびその結果としての環境中心主義の可能性を探る試み」¹¹(下線部分は論者による。以下同様)と明示し、「人間中心主義の解体と環境中心主義は、とりもなおさず、縦走式的にかつ歴史的に仮構されてある、私たちの身体と感性と思考の本性を解き明かす莫大な作業」¹²と付け加えて説明している。それに対して、山里勝己は「とりもなおさずエコクリティシズムの根幹をなす考え方である。そしてこ

⁸山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003年6月」『英文学研究』81号一般財団法人日本英文学会P236

⁹山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003年6月」『英文学研究』81号一般財団法人日本英文学会P238

¹⁰山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003年6月」『英文学研究』81号一般財団法人日本英文学会P238

¹¹野田研一(2003)『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社P201

¹²野田研一(2003)『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社P203

れは人間を対象とするあらゆる学問分野をも射程におさめるものである」¹³と認識している。

そこで、本論文は上述した先行論究を参照し、エコクリティシズムの根幹を為す「環境思想における人間中心主義から環境中心主義への転移」、「人間中心主義の解体と環境中心主義」と言った、ポスト 3・11 の現在において特に必要とされる観点から、日本伝統的食文化ウナギを考察することにする。

3.日本におけるウナギの歴史を振り返って

本節では、まず日本におけるウナギの歴史を振り返って見ることにする。ウナギは、古くから日本の自然環境に存在した生物で、「縄文遺跡からの出土例もあり、万葉歌人によって賞翫されたことも明白であるが、調理法は明確ではない」¹⁴とされている。ウナギをどのように食べ物にしたかを、ウナギが最初に記録された『万葉集』(撰者大伴家持、8 世紀中頃)から見てみよう。

3.1 ウナギを食べることの由来

ウナギが『万葉集』巻十六大伴家持「瘦人を 嗤^{あざけりわらう} 咲歌二首」に見られ、現在『国歌大観』の 3853 と 3854 に載せられ、応答した歌¹⁵に散見する。以下のように引用する。

石麻呂に 吾物申す 夏瘦に よしと云う物ぞ むなぎ取りめせ
(『国歌大観』3853)

友人の石麻呂に夏バテに何を食べたらいいかと相談された大伴家持が、ウナギを勧めた上、ウナギを取るために、川に流されないようにも注意するような、次の歌で応答した。

瘦す瘦すも 生けらばあらむを はたやはた むなぎをとると 河に流るな(『国歌大観』3854)

¹³山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003 年 6 月」『英文学研究』81 号一般財団法人日本英文学会 P238

¹⁴日本風俗史学会篠田統・川上行蔵代表編(1978)『図説江戸時代食生活事典』雄山閣出版 P30

¹⁵日本風俗史学会篠田統・川上行蔵代表編(1978)『図説江戸時代食生活事典』雄山閣出版 P30

応答した歌の通り、日本では古くから夏バテのスタミナ食¹⁶としてウナギを食べたことが分かった。「河に流るな」を川に流されないようにという解釈が可能である以外に、「河に流るな」というのが、川水で祓えをすることを踏まえているわけでもあるまいが、土用の丑の日に水浴をすると病気をせぬという俗信は今も各地に行われている¹⁷ともされている。日本人の生活にとって、ウナギは夏の日本列島の環境と切っても切れない関係にあると窺われる。

3.2 土用の日に食べる食べ物として定着

田辺貞之助にれば、「丑の日 夏の土用中の丑の日。昔からこの日には鰻をくうことにきまっていたが、また土用灸といって灸をすえる日でもあった」¹⁸と言い、「丑の日はのらくらとしたものを喰い」、「丑の日はのろのろされぬ蒲焼屋」、「牛の日にかごで乗り込むたびうなぎ」、「丑の日の仕置は母も鬼になり」¹⁹などの川柳を例に取り上げて、その習慣を説明しているが、いつ頃から土用の丑の日にウナギを食べ始めたかは、まだ明確にされていない。八木敬一の説によれば、「土用鰻の薬効を最初にといたのは平賀源内と云われ、懇意の鰻屋から頼まれて看板に書いたとの説がある。その真偽のほどは分からないが、体力消耗のはげしい猛暑の最中に、滋養に富む鰻を食べるということは、理に叶ったことであり、鰻屋の宣伝としてはもっとも有効であろう」²⁰と商売の宣伝から始まったと言われている。起源ははっきりしないが、江戸時代(1603-1867)にはこの習慣が日本の生活に定着していたことは間違いない。

3.3 蒲焼の始まり

現在、ウナギ料理の典型として周知の蒲焼も、江戸時代に定着した料理法である。「語源としては、当書の蒲焼の形が「蒲の穂」に似ていたとする説が多数派のようで(『神代余波』、『守貞漫稿』、『俗事百工起源』)、時代を経て、簡

¹⁶西角井正慶編(1987・初1958)『年中行事事典』東京堂出版P546では大伴家持の「瘦人を嗤咲歌二首」(『万葉集』一六の「瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはたむなぎをとると河に流るな」を引用した。田辺貞之助(1962)『古川柳風俗事典』青蛙房P343に挙げた「鰻屋に囲われの下女今日も居る」について、「鰻は精をつくからということもあるが、旦那は坊主なので、寺ではくえないから妾のところ来てくう。というわけで、来るたびに下女を鰻屋へやる」と説明している。

¹⁷西角井正慶編(1987・初1958)『年中行事事典』東京堂出版P546

¹⁸田辺貞之助(1962)『古川柳風俗事典』青蛙房P35

¹⁹田辺貞之助(1962)『古川柳風俗事典』青蛙房P35

²⁰八木敬一(1989)「夏」佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P58-59

形から平形に変化した後にも、その名称が受け継がれたものと考えられる」²¹という。そして、「店売りの蒲焼屋の起源は、『世のすがた』によれば、「うなぎの蒲焼は天明のはじめ上野山下仏店にて大和屋といへるもの初て売出す」とあるように、天明(1781-1789)以後のことで、それまでは辻売・行商などによって売られていた」²²そうである。このように、「近世初期にはかば焼きは高級料理ではなく、『松の葉』には「松原通りの蒲焼は召すまいか、家来錢徳ないのない、とかく食はねば身が細る」と見える」²³のである。このように、庶民的な食べ物の「蒲焼」が有名になったのは、少なくとも寛永3年(1626)『江戸名所百人一首』²⁴に「蒲焼屋」が紹介されるまで待たなければならないであろう。なお、「この蒲焼に使用される鰻には、江戸前鰻と旅鰻とがあり、その味にかなりの差があった。『物類称呼』の「鰻驪」の項に、「江戸にては浅草川深川辺の産を江戸前とよびて賞す。他所より出すを旅うなぎと云つ」と記されているように、人は江戸っ子、魚は江戸前(江戸前面の海)でとれたものが最上であり、地方産のものは一段下に見られていた」²⁵という。こうして、蒲焼に使用されるウナギには、江戸前鰻と旅鰻との種類の違いがあり、江戸子のこだわりの1つまでになったのである。

3.4 うなぎ飯の起源

更に、蒲焼のウナギからウナギ飯へと進展を見せたのは、「文化(1804-1818・論者注)年間に、江戸堺町の芝居の金主に、大久保今助という大変な鰻好きがいた。多忙なため焼きたての蒲焼が食べられないので、炊きたてのどんぶり飯の中へ蒲焼を入れてみたが、蒲焼の味がおちないばかりか、飯にもうなぎの味がしみ込み、非常においしかった。それを商売に結びつけたのが、「元祖鰻めし」の看板をかかげた、日本橋葺屋町の大野屋であった」²⁶という。現在の日本社会のウナギへのこだわりは、江戸時代の庶民文化の発展から継承された食文化だったのである。

²¹佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P179

²²佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P185

²³日本風俗史学会篠田統・川上行蔵代表編(1978)『図説江戸時代食生活事典』雄山閣出版P31

²⁴日本風俗史学会篠田統・川上行蔵代表編(1978)『図説江戸時代食生活事典』雄山閣出版P76

²⁵日本風俗史学会篠田統・川上行蔵代表編(1978)『図説江戸時代食生活事典』雄山閣出版P180

²⁶八木敬一(1989)「夏」佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P139

3.5 精根を作るものとして活用

前述の、夏ばてのスタミナ食とされた『万葉集』に対して、「我幼き頃より^{むなぎ}鰻を好みて、今も猶やまず(中略)いかさまにも天下無双の美味なるが上に、諸病を治し、腎精を補ひ氣力を益す、和漢百菓の長たり」(神代余波)などと、微笑ましきぞっこん振りである²⁷ともある。「和漢百菓の長」と言われたウナギだが、川柳で表現された「鰻屋に囲われの下女今日も居る」²⁸のように、「鰻は精がつくからということもあるが、旦那は坊主なので、寺ではくえないから妾のところへ来てくう。というわけで、来るたびに下女を鰻屋へやる」²⁹の世俗な一面を反映している。また、夫婦揃いでウナギを食べているをからかう「夫婦してうなぎを喰へばおかしがり」³⁰も「深更家鳴り振動か」³¹と言った夫婦の夜生活を暗示している。また、「強精剤としての蒲焼と遊所との取り合わせは、一つのパターンをなえしており、後出の狐鰻、重箱鰻をはじめ、吉原「中の町」にも「うなぎ見世」があったと『明和誌』にある」³²とあるように、江戸時代の遊廓文化とも密着しているようである。

肉食を仏教の影響下で否定した日本文化が動物性蛋白質や脂質をとる最も重要な手段としてウナギを重視し、さらに庶民文化の発展の中で重要な食文化として発達していった様子が以上の資料から窺える。

4.各領域で取り上げられたウナギの形象

日本文化とウナギの関係は食文化ばかりではない。以下、ウナギに関する各領域で取り上げられた形象を考察してみよう。

4.1 ウナギに関する諺

日本語の辞書を調べれば、「うなぎ寝床」、「うなぎのぼり」、「山芋鰻」(山の芋化して鰻となる)と言ったような諺が簡単に見つかる。幅が狭く奥行きが長い所を言う「うなぎ寝床」、好景気を指す「うなぎのぼり」以外、大きな変化が起こることを言う「山芋鰻」(山の芋化して鰻となる)については、更に「山の芋化して鰻となる」の俚諺を踏まえた句が多い。(中略)『醒睡笑』、狂言『成

²⁷佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P182

²⁸田辺貞之助(1962)『古川柳風俗事典』青蛙房P343

²⁹田辺貞之助(1962)『古川柳風俗事典』青蛙房P343

³⁰佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P182

³¹佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P182

³²佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P186

上り』などに、面白可笑しく記されている」³³のように、当時の世態を穿っているものとして使用されている。「鰻は目の葉」（ウナギのビタミン類に効果があることが知られていた）、「鰻屋のスッポン」（名人の手に掛ければ素人ではかなわない）、「膝で鰻を折る」（手段・方法が適切でないことを嘲笑して言う）、「胡麻鰻は後から」（名物は最後に食べる）など、庶民の知恵を表現する比喻にも多く取り上げられてきた³⁴。

4.2 奇跡的なウナギの一生の生態

日本人には馴染みの深いウナギは、実は長い間生態が謎のままであった。ようやく 20 世紀後半にその生態が解明され、日本で獲れるニホンウナギは、フィリピン東方の北赤道海流域で孵化し、黒潮に乗って日本列島まで回遊し、日本の川や湖沼で小魚、エビ、水生昆虫などを捕食しながら成魚となり、また海へ帰ることが分かってきた。近年、急激に漁獲高が減少し、ウナギの絶滅を心配して、『ウナギ地球環境を語る魚』を書いた井田徹治は、ウナギ研究学者の研究成果をベースに、以下のように述べている³⁵。

九州大学のウナギの研究者、小澤貴和、林征一両博士は、その著書『ウナギの科学』の中で、ウナギ資源の減少傾向に触れ、「なぜ、ウナギはこのような複雑な一生を送るのであろうか。人間によって河口で捕らえられ、池で育てられ、最後に蒲焼きにされるためにではない。子孫を残すためである。ウナギはこのような一生でしか子孫を残すことができないのである」と指摘し、「人間の食欲を満足させるためにウナギを滅ぼす資格は誰にもない。消費大国だけであってならない。ウナギを大事にし、共存・共栄を図らねばならない」と主張している。

現在、明らかになっているウナギの一生は、奇跡的な一生だと言いはない。以下、その奇跡的なウナギの一生の生態に因んで、創作した小説、映画を見てみよう。

³³佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋P183

³⁴ (財)海洋生物環境研究所(2003)「海の豆知識」16 http://www.kaiseiken.or.jp/umimame/lib/umimame_16.pdf参照。

³⁵井田徹治(2012・初2007)『ウナギ地球環境を語る魚』岩波書店P211

4.3 火野葦平の小説『赤道祭』(1951)

研究者や学界の間では、このような奇跡的なウナギの一生の生態がまだ分かっていない時期、火野葦平が水産学会のニュースとして南洋でウナギの稚魚が発見されたことが報道された新聞記事を読んで、長編小説『赤道祭』を新聞に連載した。それはウナギの生態を探りに出る大衆的な海洋冒険小説の類である。

作品中、日本の河川、湖沼などで暮らしていたウナギは、生涯の最後の時期に川を下り、海に入り、長い時間をかけて南洋・赤道直下の深海に集結し、そこで卵を産んで受精させ、一生を終えるという。ウナギの卵は、ほどなく孵化し、海中を漂流しながら大きく成長して、柳の葉のようなレプトケファルスと呼ばれる稚魚となる。また、黒潮に乗って、東南アジア、台湾、日本に回遊してくる過程で、円筒形の体形に変わり、「シラスウナギ」と変る。それを川口などで捕獲し、養鰻池で養殖して食卓に載せるものがウナギだということである。何故、ウナギがこんなに複雑な一生を送らなければならないのかは、現在でもまた謎のままである。

火野葦平の『赤道祭』は、ウナギが送る複雑な一生を描いた点では意味のある小説だと言える。『赤道祭』の連載終了、伊豆肇、山根寿子、杉葉子、藤田進などの当時人気俳優たちの出演で映画化された。ウナギの生態が発表された風潮に乗り、小説を映画化したとも見られるが、ウナギへの生態学的関心がこの時期から日本で生まれたと言っても過言ではない。

4.4 今村昌平監督の映画『うなぎ』(1997)

『うなぎ』は、吉村昭の小説『闇にひらめく』を原作とし、1997年に今村昌平が脚本、監督を担当し、松竹が制作した映画である。

出張から早めに帰宅した主人公が、妻が男とベッドに入り、セックスしているシーンを目撃し³⁶、その場で妻を殺害して監獄に入った。それ以来、刑務所に入り、人間不信に陥り、ペットであるウナギにしか心を開かない主人公が、刑務所から出た後、静かに理髪店を営んでいたところ、自らの境遇を嘆き、自殺を図った女性との心的交流を通して、妊娠した彼女を受け入れ、新たな生活を開始する道を選んだ。映画の主題は、人間よりも、ウナギが身近な存在だという以外、産卵し、孵化しても結局は誰の子かが分からないウナギの生態に因

³⁶偶然にも2014年に刊行した村上春樹最新短編集『女のいない男たち』(文藝春秋)に収録された「木野」と同じ主旨である。

み、女が孕んだどこかの知らない男の子供を自分の子だと認めるほど、彼女を人生の伴侶にした意図もあろう。ウナギを映画の題名にしたこと及び男女のハッピーエンディング見ると、正にウナギの生態を借りて、人間模様を描いた意図が明確になる。

以上の小説作品、映画からは、複雑で困難に満ちた一生を送るウナギを、人間に人生の意味を教える存在として捉えている様子が窺える。

4.5 和田はつ子『料理人季蔵捕物控 旅うなぎ』(2009)

時代小説『料理人季蔵捕物控 旅うなぎ』には、第4話として「旅うなぎ」が取り上げられている。

「毎年、土用が近づくと一字、塩梅屋の客足は遠のく。土用はうなぎ屋が繁盛するからであった。長次郎はうなぎの料理は作らなかった」(P170)から語り始めたこの作品では、ウナギに上位とされた江戸前ウナギと、下位とされた旅ウナギの味が差異化されている。それにしても、江戸前ウナギの味には敵わないが、旅ウナギは、故郷の風味が味わわれ、格別だと強調されている。ウナギの味を差異化することを目的とするのではなく、故郷の味こそ、人間が生きていく上で、心が帰趨する大事なものを宣告するように見て取れる。

4.6 メディウムとしてのウナギ—村上春樹の「うなぎ説」(2003)

世界各国によく知られ、作品が広く読まれている村上春樹も、ウナギに関心を寄せている。柴田元幸のインタビューを受けた2003年³⁷に、村上春樹は小説の創作について、「三者協議。僕は「うなぎ説」というのを持っているんです。僕という書き手がいて、読者がいますね。でもその二人でだけじゃ、小説というのは成立しないんですよ。そこにはうなぎが必要なんです。うなぎなるもの」³⁸と表明した。村上春樹の主張によれば、小説を成立させるには、書き手と読者との間に、三者協議に立ち会うものを、便宜上自分の好きなウナギと名指し、登場させたという。また、書き手と読者との意思疎通をうまくするために働いてくれるウナギとは、「第三者」³⁹、「共有されたオルターエ

³⁷柴田元幸(2004)「Preface」柴田元幸編訳『ナイン・インタビューズ柴田元幸と9人の作家たち』アルクP4

³⁸柴田元幸編訳(2004)『ナイン・インタビューズ柴田元幸と9人の作家たち』アルクP278

³⁹柴田元幸編訳(2004)『ナイン・インタビューズ柴田元幸と9人の作家たち』アルクP279

ゴ」⁴⁰(もう一人の自分)だと付注されている。村上春樹の発言では、小説を立体的に書くに際して、ウナギの登場を必要とし、そこで他者と視点を共用することの重要性も増してくるし、何かを交換し合うことにより、結果的に「治癒行為」⁴¹につながり、自己治癒を可能にさせることにもなるということである。要するに、小説を書く際に引き込んで来なければならないウナギとは、他者との視点を共有する架け橋のようなもの、いわば、メディウムであり、そのような意味でウナギを見ることの可能性が示唆されているのである。このように、世界的に有名な日本現代作家村上春樹が自分の小説理念を説明する際も、ウナギを登場させなければならないほど、ウナギは日本人の精神性、文化性にとって非常に重要な意味を持っているものだと否めない。

このように、ウナギが蒲焼、ウナギメシのように日本の食文化に根ざした歴史、庶民の生活知恵を表わす諺、ウナギの謎に包まれた生態を拡大し、人間の持つ愛欲、葛藤を描いた小説、映画などの多方面から、古き時代から人間の友とされてきたウナギを多角的にエクリチュールしたことは、ほかでもなく日本人、日本文化において、ウナギが示した重要な位置を物語っていると言えよう。

5. 結論—自然と調和する道を探求

大自然の恩恵である天然資源の1つとして、日本人が利用してきたウナギが、今は、絶滅しそうになっている。日本人の食卓に欠かせないウナギに代わって使用できる食品、例えば茄子を蒲焼のような風味に工夫するように、日本人は一生懸命に模索し、日本の伝統的食文化を変える可能性を探っているが、そうした表面的問題ではすまない警鐘をウナギの絶滅は告げている。長い年月、人間と付き合ってきたウナギの絶滅は、エコクリティシズムの観点によれば、人間が環境を酷使し、利用可能な「資源」としてのみ見ること、つまり経済的観点だけが肥大化した見方で世界を見る現代文明の功利的な視線の病巣を教えてくれると言えよう。ウナギ絶滅の問題をただ日本の伝統的食文化の面からのみ見ることではなく、経済効率を絶対化するという、自然と人間との今までの不均衡に発展してきた関係を変えることにより、切り開かれる新しい可能性を考えるべき時期が到来している。長い歳月を経て築かれてきた一国の食文化を

⁴⁰柴田元幸編訳(2004)『ナイン・インタビューズ柴田元幸と9人の作家たち』アルクP279

⁴¹柴田元幸編訳(2004)『ナイン・インタビューズ柴田元幸と9人の作家たち』アルクP283

担ってきた「ウナギ」の消滅を契機に、環境破壊が進み、深刻な問題を抱えている 21 世紀においては、資源や環境保護と関わるエコロジー的視点と、人間中心の環境を創出する経済的視点、さらには人間の食文化や自然利用が並存する、いわば、自然と調和する道を求める視点はとりわけ欠かせない。この 3 つの視点を統合し、失われつつある各分野の均衡を再び回復するような、避けて通れない課題が、正に今全人類に課されようとしている。

(本論文は台湾科技部補助專題研究計画 102-2410-H-032-079-の研究成果の一部であり、2014 年 8 月 22 日～24 日にインドネシア・バリ島で開かれた「2014 アジア未来会議」で発表した内容を加筆訂正したものである。)

テキスト

火野葦平(1951)『赤道祭』新潮社

今村昌平監督(1997)映画『うなぎ』松竹

和田はつ子(2009)『料理人季蔵捕物控 旅うなぎ』角川書店

本論文於 2014 年 10 月 15 到稿，2014 年 12 月 5 日通過審査。

参考文献

(一)書籍・論文

- 西角井正慶編(1987・初 1958)『年中行事事典』東京堂出版
田辺貞之助(1962)『古川柳風俗事典』青蛙房
日本風俗史学会篠田統・川上行蔵代表編(1978)『図説江戸時代食生活事典』雄山閣出版
佐藤要人監修古川柳研究会々員十四氏共著(1989)『川柳江戸食物志』食辛房・太平書屋
ウルリッヒ・ベック著・東廉・伊藤美登里訳(1998)『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局
野田研一(2003)『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社
柴田元幸(2004)「Preface」柴田元幸編訳『ナイン・インタビューズ柴田元幸と9人の作家たち』アルク
Ulrich Beck 著・国立編訳館・汪浩訳(2004)『風険社会—通往另一個現代的路上』巨流図書公司
山里勝己(2005)「書評野田研一著『交感と表象—ネイチャーライティングとは何か』松柏社、2003年6月」『英文学研究』81号一般財団法人日本英文学会
井田徹治(2012・初 2007)『ウナギ地球環境を語る魚』岩波書店
石弘之、安田喜憲、湯浅赳男 (2008)『環境と文明の世界史』洋泉社
松岡幸司 (2011)「『1842年7月8日日蝕』：翻訳と解説—ネイチャーライティングとしてのシュティフター」『信州大学人文社会科学研究』4号
マニユエル・ヤン(2012)「負債資本主義時代における黙示録と踊る死者のコモンズ」河出書房新社編集部編『歴史としての3・11』河出書房新社
村上春樹 (2014)『女のいない男たち』文藝春秋
(二)インターネット資料
(財)海洋生物環境研究所 (2003)「海の豆知識」16
http://www.kaiseiken.or.jp/umimame/lib/umimame_16.pdf
巴山岳人の論説は、<http://www.asle-japan.org/環境文学用語集/エコクリティシズム-環境批評-ecocriticism-environmental-criticism/>
Wikipedia「核兵器の歴史」
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A0%B8%E5%85%B5%E5%99%A8%E3%81%A%E6%AD%B4%E5%8F%B2>
Wikipedia「ゴジラ」
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B4%E3%82%B8%E3%83%A9>